

・「差別者」イエス

イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」とお答えになった。しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやっちはいけない」とお答えになると、女は言った、「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。(マタイによる福音書一五章二一節～二八節)

「そこ」というには、一四章三四節を見ると、ゲネサレトという土地だ、ということになります。キリスト新聞社版「新共同訳聖書辞典」によると、ガリラヤ湖北西岸の肥沃な平原、南北六キロ、内陸に三キロ伸びた不等辺三角形、地中海水面より一八〇メートルも低く、気候が温暖で泉も多く、今日はバナナも栽培されている、というところですよ。ティルスとシドンというのは、地中海沿岸にある、現在のレバノン共和国の最古の都市で、古代には、海上貿易によって繁栄していました。ゲネサレトから北北西に進んで、その地方に行かれた、ということです。休養のためでしょうか？気分転換のためでしょうか？

しかし、休養が休養でなくなる事件が起こります。この地に生まれたカナンの女が現われ、娘の病気をいやしてほしいと懇願したのです。マルコによる福音書によると(七章二六節)、この女はギリシア人で、この地方で生まれた人となっていますが、いずれにしてもユダヤ人ではありませんでした。弟子たちにすれば、「休養」どころではなく、「仕事」が入ってきたのです。

今でも、芸能人がよく外国に休養に出掛けますが、それは、マスコミや人々に騒がれないで、一人の人間として、ゆっくり休養できるからなのだと思います。ところが、その休養地で、母国にいる時と同じように騒がれたら、がっかりするでしょうね。弟子たちの心境は、まさに、それだったと思われれます。イエスにも、おそらく同じ気持ちで働いていたのではないのでしょうか。

ところが、この女が、「主よ、ダビデの子よ、」(この言葉は、イスラエル人でなければ知らないはずの、来たるべきメシア、救い主のことを示しています)とイエスのことを的確に捉えているので、せっかく外国に来た意味が薄れてしまいます。だから、「イエスは何もお答えにならなかった」のです。しかし、これもよく考えてみるとすごいことです。もし、私だったら、人の評判を気にしていますから、内心は別にして、表面は「営業用スマイル」で、一応丁寧に応対していたらと思うのです。「せっかくだけど、今、その準備ができていないから、また、来週にしてくださいませんか」とかなんとか言って、断るだろうと思うのですが、イエスは正直です。

弟子たちも、イエスが何の反応も示さないで、彼女を無視しているのを見ると、「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので」とイエスに頼みます。弟子たちが、自分たちで

追い払えばよさそうなのに、イエスのせいにするのは、おそらくイエスが、この旅を提案されたからなのではないでしょうか？ところが、イエスは、相変わらずこの女を無視したまま、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにはか遣わされていない」と答えます。外国人に用はない、というわけです。ここで、大概の人ならムツと来るところなのですが、この女は違いました。なお、しつこくイエスの前にひれ伏して、「主よ、どうかお助けください」と懇願します。よほど切羽詰まっていたのでしょう。何を言われても娘の病気をなおすのだ、という意気込みがうかがわれます。

ここまでは、イエスも我慢しておられたのですが、ついにキレます。

「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」

おそらく、厳しい顔つきで、吐いて捨てるように言われたのでしょう。でも、これは大問題です。イスラエルが、「子供」で、外国人は、「小犬」だ、と言ったのですから。私は、犬を飼っていますから、認めたくないのですが、聖書の世界では、犬は軽蔑された存在でした。人に媚びたように尻尾を振るからでしょうか。いずれにしても、そのもっとも軽蔑された「犬」にたとえてしまったのです。もしも、現代のように、取材陣が貼りついていれば、たちまち、世界中に打電されたかも知れません。

「イエス、重大な差別発言！外国人を犬と呼ぶ！」

と。この箇所は、解釈の困難な箇所とされているようです。「神の子」のイエスがどうして、このような発言をされたのか？

しかし、私は、イエスが「完全な人間」だったから、このような差別発言がなされた、と思っています。道徳的に、「完全な人間」は一人もいません。差別は、絶対にいけません。しかし、どんな差別もそうなのですが、人は、何かに捉われていると、無意識に、差別してしまうことが、よくあるのです。差別を追求された人は、ほぼ例外なしに「そんなつもりはなかった」と言い訳します。イエスですら、道徳的に完璧であった、ということはありません。

道徳は、人のなすべきこと、してはならないことのひとつの目安、マニュアルです。医療においてもマニュアルに捉われすぎると、患部ばかり見て、患者という人間の心を見失うおそれがあります。マニュアルで人は救われません。同様に、道徳は、人を裁くことは出来ても、救うことは不可能です。宗教と道徳を一緒にしてはなりません。

「道徳は<安全>な思想で、宗教は<危険>な思想だ」と言った人がいます。元京都精華大学学長に笠原芳光さんですが、彼は、その著書「宗教の森」（春秋社一九九三年十二月一〇日、第三刷、二一二頁）で、こう言っています。

「道徳はおもに人間が社会生活を営むのに必要なルールである。人と人とのかわりがうまくいっているのは、社会にとって安全な状態だ。だから道徳は安全をつくりだす思想というべきだろう。

だが人間は、人と人との関係だけではもの足りないと感じたり、生きてゆけないと思ったりする。なにか人間を超えたものを求めたくなるときがある。神や仏といったものでも、また真の自己といったものでもよい。それは道徳では得られない価値である。

それを宗教というが、宗教はときとして、道徳に反するものとなる場合がある。殺人のような悪事を犯した人はもう生きていくべきでないのか。

そんな悪人がなお生きることができるのは、なんらかの意味で宗教にたよるほかはない。しかも善人もいつ悪人となるかわからぬ存在である。

悪人をも救うのが宗教であるとすれば、宗教は<危険>な思想である。人間は<安全>な道徳だけでなく、ときには<危険>な宗教を必要とする。」

「宗教はときとして、道徳に反するものとなる場合がある」と彼は言っていますが、イエスの態度を道徳のレベルで解釈しようとするとう無理が出て来ます。

新約聖書のヘブライ人への手紙四章一五節に、こんな言葉があります。

この大祭司（キリスト）は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。

ここでの「罪」は、道徳的な「罪」ではなく、すでに申し上げたように、神との関係における「罪」、つまり、善悪の究極的な判断を神に代わってしてしまうこと、的外れの判断のことを言っているのだ、と思います。前だけ見ていれば、後は見えないのが、人間の決定的な限界です。イエスは、私たちとまったく同じ限界の中を生きられたのです。しかし、神との関係において「罪」を犯されなかった。その典型的な姿が、十字架上で示されています。

三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。（マルコによる福音書一五章三四節）

神にも人にも見捨てられたイエスでしたが、

「天は、われを見捨てた」とは言われず、

「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と神に問われた。自分の置かれた状況があるがままに、素直に受け入れつつ、なお自分で、究極的な結論を下しておられない。神の領域を犯してはいない。これが「罪」を犯されなかった、ということなのだと思います。神から人を引き離すことが使命のサタンは、この時、決定的な敗北を味わったのだと思います。まさにへりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。（フィリピの信徒への手紙二章八、九節）

「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」というこの言葉は、何か十字架の苦痛を耐えたことを意味しているようですが、私は、神にも人にも見捨てられた極限状況の中でも、神の座を奪うことなく、問い続けられた、神に従順である、という関係をこわすことはなさらなかった、ということだと思っています。これは、人となられた神でなければ、なしえないことだったのです。それをイエスは、「神の子」なのだから、道徳的にも「罪」を犯すはずがない、と受け取るから、無理な解釈が必要になってきます。

ある教会での会議で、暴力問題が議論されたことがありました。道徳的に、暴力がいけないのは決まりきっています。でも、教会の中で暴力事件が起こった。一方は、なぜ、そのようなこと

が起こったかを問題にしようとしているのに、他方は、暴力はいけない、という道徳的な罪を問題にしていたように、私には見えました。その議論の最中に、ある信徒の方が、

「イエス様も暴力を振るったことがあったんじゃないですか」

と発言しました。エルサレム神殿で、商売をしていた人たちの台をひっくりかえしたり、縄の鞭で商人を追い払われたことを指しています。すると、すかさず、ある牧師さんが答えました。

「イエスさまのは、暴力ではなくて、愛のパフォーマンスだ」と。これには参りました。イエスさまがやれば、暴力ではなくて、愛のパフォーマンスだなんて、どうしても無理があると思いませんか？イエスさまなら、何をなさっても、ご無理ごもつとも、というイエス観を私は「イエス偶像主義」と考えています。

私は、イエスが「人となられた神」という、大事なキリスト教信仰の基本は、地上を歩まれたイエスが神そのものであった、とは思いません。神そのものであれば、言ってみれば、イエスは、スーパーマンだということになりませんか？それでは、先程のヘブライ人への手紙の「あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」という言葉は、当てはまらなくなります。

さて、カナンの女の物語に戻りましょう。ここでのイエスは、おそらく頑固なユダヤ人に、どのようにして理解してもらおうか、ということを考えていて、それで頭がいっぱいだったのではないのでしょうか？そういう時には、人間は、他のことを考えられなくなるのが普通です。イエスも私たちと同じ人間だったのですから、カナンのが、うるさく感じられたとしても不思議ではありません。イエスは、私たちと違って、常に正直だった。私たちのように、「たてまえとほんね」の使い分けはなさらない。「営業用スマイル」などなさらない。だから、不機嫌さを隠されない。陰悪なムードになります。しかし、彼女は、ひるまないのです。願い続けました。強烈な欲求に駆られた二人に出会いは、遠ざかる一方です。

対話に大事な原則があります。前に、「背中でものを言っていないですか？」というところでも申し上げたように、相手の気持ちを受容する、ということです。良い悪いではなく、気持ちが受容されないと、ほんとうの対話は成り立ちません。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とイエスに言われたところで、彼女は、キレずに、イエスの気持ちに気づきます。ここが、彼女のすごいところです。普通であれば、あれだけ言われれば、キレて当たり前です。

「えー、結構ですよ。もう頼みません。すべての人を受け入れている、という評判は、うそだった。なんですか、失礼な！人を小犬呼ばわりして！」

こう言って、帰ってしまっても不思議ではない場面です。だが、彼女に冷静さが残っていた。この場面、彼女が先手を取るのです。いつもは、イエスが先手を取っているのですが。

「主よ、ごもつともです。」

これで、イエスは、ハッとします。誰でも、どんな場合でも、気持ちを受け入れられると、人は落ち着きます。その上、彼女のすばらしいユーモアに満ちた言葉が続きます。

「しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」

これに対するイエスの態度がすばらしい。素直にシャッポを脱がれるのです。しかし、新共同

訳の「婦人よ、あなたの信仰は立派だ」は、何か負け惜しみしているみたいで、私は個人的には、いただけない。むしろ、以前の口語訳の「女よ、あなたの信仰は見あげたものである」の方が、ふさわしい気がします。もっとも、真実は、イエスさまに会って確かめるしかないのですが……。

もし、わたしだったら、イエスのように、すなおにシャッポを脱げたか疑問です。おそらく負け惜しみしながら、

「うまく言ったつもりがどうか知らないけれど、今日は休みと言ったら、休みなんだ。帰りなさい！」

くらいのことを言ったかもしれません。ヨハネによる福音書の一四章六節に、イエスの有名な言葉が示されています。

「わたしは道であり、真理であり、命である」

この「真理」という言葉について、「ことばコンセプト事典」（第一法規、平成五年四月二〇日、初版第四刷、八一八頁）で調べてみると

「ギリシア語の $al\thetaeia$ は「隠蔽されたもの」を表す $l\theta\epsilon$ に「否定、剥脱」を意味する接頭辞 $a-$ がついたもので、そもそもは「覆われていないこと、あらわすこと」という原義をもった否定的複合語である。したがって、このことばが示すように、古代ギリシア人にとって「真理」とは存在そのものが隠されずあらわである状態のことであった。」

となっています。その意味で言えば、イエスの人格に隠れたところがない、つまりあるがままに正直である、ということになります。私たちは、常に正直に、というわけには行かない場合が結構あります。先程の「営業スマイル」みたいに。でも、イエスは、正直だった。裏表がない。神が人となられたのでなければ、とても出来ないことです。

だが、キリスト教の歴史では、地上を歩かれたイエスが、金ピカの神様そのものだ、と考えた。だから、その神様を殺したユダヤ人は、けしからんという、ユダヤ人差別が起こったのです。誰が見ても神様と分かるような人を誰が十字架につけるでしょうか。金ピカのイエスは、偶像そのものと言ってよいと思うのです。そして、キリスト教こそ唯一の真理だと信じたから、他宗教を排除した。

大航海以後のヨーロッパ諸国の植民地獲得競争（帝国主義的侵略）の波に乗って、そして、宗教改革運動に対するカトリック教会の巻返しとしても、全世界に宣教師が送られ、現地の宗教を滅ぼし、教会を根付かせました。先住民族を少数民族にしてしまったことにキリスト教も加担したとも言えると思います。プロテスタント教会だって、同じでした。現在の地球環境破壊の遠因を作ったかも知れない。なぜなら、自然と共存する先住民族の生き方が、主流になっていけば、今日のようにはなっていなかったはずです。いわゆる先進諸国と偶像イエス主義のキリスト教は、その責任をしっかりと自覚する必要があると思うのですが、どちらにもその自覚があるようには見えません。イラクに対するアメリカの傲岸な態度など、その典型です。

だいぶ脱線してしまいました。いずれにしても、キリスト教が根源的に問われている、ということも申し上げたかったのです。イエスが「わたしは真理だ」と言われたことは、決してわたし以外は真理ではない、と言ったのではないと思っています。その点、現在の世界教会協議会（W

CC)とカトリック教会は、他宗教との対話を大切にしようという方針がはっきり打ち出されていて、とても心強いです。宗教が独善的になったとき、ろくなことが起こっていません。

結論的に申し上げますが、「差別者イエス」ということは、イエスすら差別したのだから、差別が起こるのは仕方がない、ということではなくて、限界を持った人間は、差別を起こしやすい。だから、もっともっと差別に敏感にならなければいけない、ということです。なぜなら、神様がいちばん気にかけておられるのが、最後の審判の基準でもある、「最も小さい者の一人」、つまり、それは人間の差別によって小さくさせられた人の一人なのですから、神様を信じます、神様に従います、と告白する者の最大の課題だからです。